

## 第40回(平成30年度)全日本中学生水の作文コンクール

「水の日」の事業の一環として、次世代を担う中学生より本年度も国内外から約14,000編にのぼる作文の応募があり、その中より今回は授賞3作品をご紹介します。

### 最優秀賞 内閣総理大臣賞

#### 時をこえて ～未来へ～

宮城県 宮城県仙台二華中学校 3年 井崎 英里



雪どけを迎えた春、私は「ダムより高い鯉のぼり」の記事を新聞で見つけ、釜房ダムを訪ねました。目の前に広がる森と湖。優雅に泳ぐ鯉のぼり。そんな美しい春の景色を、1枚の風景画として残したいと思ったからです。

釜房ダムとは、私の住む仙台市より西の、宮城県のほぼ中央を流れる名取川の支川、碁石川上流の川崎町という小さな町に作られた特定多目的ダムです。上流の太郎川、北川、前川より集められた水は、ダムによる釜房湖となり、私が訪ねた日も、湖いっぱい満たされた水一面が、遥か遠くは瑠璃色に、時々太陽の光を浴びて金色に輝いて見えました。ダムを囲むように連なる山々の緑、春を知らせる満開の桜の淡い紅色、ダムのゲートから流れ出るしろかね色の水、そんな風景画のような世界の大空を、大きな鯉のぼりがのびのびと泳いでいました。これが私の国、日本の水の源であり、この地球が「水の惑星」と呼ばれる由縁なのでしょう。

世界には、水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。水の惑星と呼ばれる地球であっても、利用可能な淡水の割合は極わずかで、ほとんどが海水、私たち人間をはじめ、あらゆる生物が生きるために使える水ではないのです。

この3月に訪ねたシンガポールもまた、水問題を抱えた国の1つでした。赤道直下に位置し、年中気温と湿度が高く、降水量も多い国であるのに、狭い国土には大きな河川も雨水を貯める土地もありません。さらには国土自体の保水力も乏しいことから、飲み水のほとんどを隣国からの輸入に頼っていると聞きました。飲み水が手に入らないわけではないのですが、滞在初日に、蜜柑色をした310ミリリットルのボトルを渡され、滞在期間中は、毎朝このボトルに水を入れて持たされることとなりました。水を贅沢に使う観光が有名な都市の、現実の水問題に私は強い衝撃を受け、いつも以上に水を大

切にいただくように心がけました。

シンガポールの水事情を思い出しながら、私は自分の国である日本のことを考えました。日本には四季があり、梅雨や秋雨の影響で、1年の降水量に大きな変化はあるものの、世界的に見れば、恵まれた水環境のはずです。自宅にも学校にも、街のいたる所に水道が引かれ、その蛇口をひねれば、水やお湯がすぐに流れ出ます。そのため、私たち日本人は、いくらでもあるものかたとえに「湯水の如く」と使うのです。果たして水は、本当にいくらでもあるものなのでしょうか。

私の忘れかけていた記憶、忘れようとしている記憶「東日本大震災」。小学校1年生も終わろうとしている春のあの日まで私は、水のない生活をしたことも、考えたこともありませんでした。蛇口から水の出ない日々、やっと水を手にできた時の喜びを、私は忘れられません。空から容赦なく降る雪も、沿岸の町を襲った津波もまた、水の別な姿であることが恨めしく、未来の見えない不安に誰もが涙を流した日々。時間という魔法が、少しずつ人々の心を癒やしてくれてはいるものの、何かを皮切りとし、水の隠された本性、恐ろしい姿を度々思い出すのです。

あの日から、水に対する私たちの見解は確実に変わりました。水を大切にすると同時に、いつの日か再び変貌する水の姿に警戒し、備えるための訓練を続けています。

釜房湖の美しい水を眺めながら、ふと、かつてこの湖の下に存在した豊かな耕地の広がる小さな町のことを考えました。そこに暮らしていた人々の思いと、今、目の前に広がる美しい湖とダムが、現在の私たちに不自由なく水を提供しているという現実をです。

残すべき水の歴史は、震災だけではありませんでした。今日見たこの美しい風景を、私は過去と共に未来へ描き残したいと思います。

### 優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

#### 「ありふれた水に思う —2つの感謝—

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 2年 宇野 由里子



「走らずに前に詰めて!」

指導員の先輩方の大きな声。黙々と歩く集団。鍛錬遠足練習の日、晴天に恵まれ、ワクワクしすぎて水筒を忘れてしまった私。日頃は美しい河畔の散歩道が自慢の室見川。鍛錬遠足だけあって、先生・先輩方の雰囲気も厳しい。シジミとりや潮干狩りに来る見慣れた風景も、今日はギラギラと照り返しがうめしい。

折り返し地点でのお昼の時間。公園によくある飲み水用の蛇口を見つけ、弁当よりも何よりも先に思っきり水を飲んだ。のどの渇きが癒されるなどという表現では足りない。体中の隅々まで潤いが染み渡るようだ。1度飲み終わって、いや、またもう1度。

「はあー、ホッとしたあー。」

本当にその水道水はおいしかった。心から、有り難いと実感した。

後日、悠々と流れていたあの室見川と水道水の関係に興味をわき、調べてみた。室見川の水は福岡県糸島市の瑞梅寺の水源で生まれ、曲淵ダムに運ばれ、夫婦石浄水場できれいにされて水道水となり、私たちの家庭まで届けられているらしい。150万都市の福岡市では、1日になんと40万トン、学校のプールにして1130杯分もの水が利用され、それを近郊5つの浄水場でまかなっている。頼りは福岡市に流れる132本もの川なのだが、実は水の豊富な川がなく、雨が少なくなるとは水不足になる恐れもあるほどらしい。昭和53年に実際に起こった大渇水を、両親も小さい頃に体験して覚えている。降雨量が少なかったその年は、何回かの断水を繰り返したそうだ。

当時の写真には、乾き切って細かく地割れした地面や、給水車に長い列を作るポリバケツを持った市民たちが写っている。

現在、久留米市を流れる九州最大の河川筑後川から、30キロもの距離を大きな導水管でつなぎ、水を引いている。大変だったあの遠足の3倍もの距離をはるばると、24時間365日、絶え間なく

水は駆けつけてくれる。久留米は両親の出身地だから、福岡県下で協力し合っていることがありがたく、心強く思った。

そもそも、この貴重な水はどこからくるのか?よく考えてみると水は地球の中を巡っている。雨が山に染み込んで、湧き水となって現れて、それが集まり川となり、海まで流れて蒸発し、その水蒸気が雲となり、大地に雨が降り注ぐ。まさに大自然の営みである。我々人間も含めたすべての生物を生かす奇跡の仕組みである。ただそれだけでは終わらない。その川の水が浄化され、無事家庭まで届くまでには、多くの人の努力がある。この「大自然」と「人の努力」は、24時間ずっと絶えることのない営みである点が共通している。この2つが合わさって、日本にいる私たちは、いつでも蛇口をひねれば新鮮な飲み水を手に入れることができる。安心して日々生活を送ることができるのだ。

生まれてから今まで断水などにあつたことがない私も、熊本地震の際は、自然災害の厳しさや、普段の水のありがたさを思い知らされた。家族皆が大好きで通ったあの阿蘇が被災して丸2年が経った。そもそも私が毎日お世話になっている筑後川は熊本の阿蘇生まれだ。熊本の水のおかげで日々の安心があることを思うとき、私はいつも、「まず隣人を愛しなさい(マザーテレサ)」の言葉を思い出す。人は1人では生きていけない。まず自分に出来ることから始めよう。あの遠足の日の公園の水は、阿蘇生まれの水だったかもしれない。

いつものように、また新しい朝が始まる。顔を洗うために蛇口をひねる私は、最近は必ず蛇口を少し戻す習慣がついた。阿蘇の大自然や熊本の復興を願いつつ、「大自然」と「人の努力」に感謝しながら、貴重な水を大切にしていこうと思う。

## 優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

### 今も昔も

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 3年 和田 菜花



私の部屋の窓からは浄水場が一望できる。そこにある大きなプールのような3つのろ過池は、空に浮かぶ雲を鏡のように水面に映し出している。傍には、緑青が吹いて歴史を感じさせる給水タンクが天高くそびえ立つ。春にはツツジ、秋には紅葉など、四季折々の自然と調和しており、その美しさは筆舌に尽くしがたい。この敷島浄水場は私にとって、とても身近な存在なのだ。

しかし見えているのはほんの一部で、ほとんどの設備は地下や屋内にある。ここでは主に4つの工程で浄化処理を行っている。第1に、豊富な地下水をくみ上げる。近くを流れる利根川の水ではなく、地下水を水源とするのには理由がある。長い年月をかけて水が染み込む時、土壌がフィルターのように不純物を取り除いてくれる。川の水よりも良質なので、浄化処理が簡素化され、より美味しい水になるというわけだ。大きなろ過池の底には、砂が敷き詰められており、その間を通り抜ける際にさらに不純物を取り除かれる。第2には、塩素を用いて、主に大腸菌などの人に有害な菌を消毒する。その後、人間の健康に関する31項目、水道水としての必須条件20項目の、全51項目もの厳しい水質検査をする。これに合格した安全な水が私達の家庭へ届けられる。この水は、高度な技術とそれを担う人々の努力の賜物なのだ。

しかし世界では現在、日本では考えられないような水に関する問題が起きている。

アジア諸国では水道からきれいな水が出ないところも多い。そこで井戸水を使うのだが、地下の有害な物質を含んでいることも多々ある。身体に悪いと知りながらも、生きるためにその水を飲まざるを得ない人々がいる。

また、子供や女性が水くみに時間を奪われて、学

校に通うことができない現状がある。なんと「水」は教育問題にも影響していたのだ。また、ある地域には学校に女子トイレがないために、女子が学校に行けないという現状もある。トイレがないことが女性の自由の足かせになっていることに驚いた。これらは私の予想をはるかに超えていた。

フィリピンでは水の価格の問題がある。それは、都市部に住む富裕層が水道水を安価で使用できる一方、それ以外の地域には水道が無いので、その約10倍もお金を払って水を買っているというものだ。金持ちの方が安く水を使え、貧困にあえぐ人々の方が高い水を買わなければならないなんて、本当に変な話である。世界の現状を見ると、水と人間の生活はどこであっても密接に関わり合っているの、早急に解決すべきであると思った。

もし安全な水が簡単に手に入るになれば、人々の命が救われるだけでなく、子供が教育を受けることが出来たり、女性も社会にどんどん進出していけるようになる。つまり経済発展にも繋がるのだ。誰もが安価に安全な水を得られれば、暮らしやすい世界になると思う。水は、私達に幸せをもたらす一方、生きていくのに不可欠であるが故に問題の種にもなる。私がこうして幸せな毎日を過ごすことが出来ているのは、「水」に守られているからなのだ。と痛感した。水道から出る水は、ただの水ではなく実は尊いものだったのだ。

「この給水タンクは私と同じくらいの歳なのよ。」お向かいのおばさんが言っていたのを思い出す。昭和四年から今もお休むことなく水を送り続けたそのタンクの姿は、上州のかかあ天下の芯の強さと優しさを持った彼女の姿と私の中で重なり合った。今も昔も、みんなの笑顔の源となる「水」を守り続けている敷島浄水場を、改めて誇りに思った。

「第40回全日本水の作文コンクール」で表彰された方々については、国土交通省ウェブサイトでご覧になれます。  
[http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen\\_mizsei\\_tk1\\_000010.html](http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000010.html)